感情認知トレーニング・ソーシャルスキルトレーニングVR

FACE DUO

User's Voice vol.43



児童思春期患者の対人理解を支援する
～精神科救急病棟での実践～

ときわ病院では、新患患者の半数以上が15歳以下、救急入院患者の約2割が児童思春期症例です。児童思春期医療への地域ニーズが高まる中、ときわ病院ではFACEDUOの感情認知トレーニングを活用し、子どもたちの対人理解やコミュニケーションを支援する取り組みを行っています。

特定医療法人さっぽろ悠心の郷 ときわ病院
TOKIWA HOSPITAL

ときわ病院について

ときわ病院は、1978年11月に札幌市南区常盤の地に開院し、地域に根差した精神科医療を展開してきました。現在は、精神科救急病棟、認知症治療病棟、2つの精神療養病棟の4病棟（206床）からなり、多様化する精神科医療ニーズに対応しています。2012年に運用を開始した精神科救急病棟を中心に、道央医療圏南ブロックの精神科救急の中核病院として重要な役割を担っています。当法人は、2009年10月に札幌市西区に児童精神科クリニックを開院し、子どもの診療を開始しました。その後、2013年10月に同クリニックの診療機能をときわ病院内に拡充移転し、ときわこども発達センターとして新たな体制で児童精神科診療を開始しています。現在では、ときわ病院全体の新患患者の半数以上が15歳以下の子どもであり、特に6歳以下の未就学児の割合が多くなっています。子どもの入院治療にも対応しており、最近では、精神科救急病棟の入院患者の2割程が児童思春期症例です。医療と福祉が連携し、幼児期から老年期まで、すべてのライフステージに寄り添う切れ目のない支援を提供しながら、地域共生社会の実現に向けた取り組みを続けています。



特定医療法人 さっぽろ悠心の郷
ときわ病院 理事長
館農　勝 先生

児童精神科領域について

ときわこども発達センターは、初診時0歳から15歳（中学生）までを対象とした児童精神科専門外来です。発達に関する心配や学校生活、対人関係、こころの悩みなどについて、保護者と相談しながら診断・治療を行っています。医師による診察に加え、心理師による心理検査やカウンセリング、保護者向けの育児支援講座など、多面的な支援体制を整えています。また、リハビリテーション科では未就学児を対象に、作業療法（感覚統合訓練）や言語療法を実施するとともに、自閉スペクトラム症（ASD）のお子さまを対象としたESDM（Early Start Denver Model：早期デンバー式療育モデル）にも取り組んでいます。遊びや日常生活の場面を活用しながら、コミュニケーションや社会性、言語発達などの成長を支援しています。さらに、発達支援センターや放課後等デイサービスなどの福祉部門とも連携し、医師・心理師・作業療法士・言語聴覚士など多職種が協働しながら、お子さま一人ひとりの成長と発達を継続的に支援しています。



特定医療法人 さっぽろ悠心の郷
ときわ病院 副理事長
館農 幸恵 先生

10代患者の社会復帰支援に感情認知トレーニングを活用



対象：児童・思春期の患者さん

目的：復学や社会生活への再適応支援

方法：週に1回、6~8名で精神科救急病棟で実施

集団での対話を重視したプログラム

私たちは、児童・思春期の患者さんの**復学や社会生活に必要なコミュニケーションスキルの習得を支援**するため、作業療法プログラムの一環としてFACEDUOを活用しています。FACEDUOの「感情認知トレーニング」を教材としながら、**映像を見るだけではなく、参加者同士が感情について話し合い、自分や相手の気持ちを理解する力を育てています。**プログラムは精神科救急病棟で週1回実施しており、6~8名程度の集団で行っています。刺激の少ない環境の中で、映像視聴や対話を通じて、復学や社会生活に必要なコミュニケーションスキルの習得を目指しています。

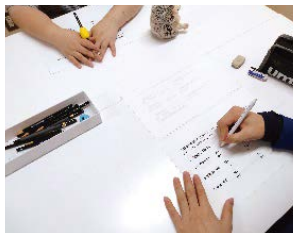
Q. プログラムはどのように進めていますか?

毎回、一つの感情のうち2つの動画をテーマに取り上げてプログラムを進めています。例えば「嫌悪」をテーマとする回では、まず「どのような場面で嫌悪の感情を抱きますか？」と参加者に問いかけます。すると、「路上喫煙を見たとき」「ごみのポイ捨てを見たとき」など、具体的な意見が挙がります。その後、「なぜそのような感情が生まれたのか」を参加者同士で考え、話し合います。私たちは一方的に知識を教えるのではなく、参加者自身の考えや感じ方を引き出すことを大切にしています。参加者が自らの体験や価値観を振り返り、「なぜそう感じたのか」を考える過程そのものが学びにつながると考えているためです。自分自身で気づき、納得しながら理解を深めることで、感情や対人関係についての学びがより実践的なものになっていきます。



Q. ワークシートにはどのような工夫がありますか?

映像の情報量に追いつくことが難しい患者さんもいるため、毎回4枚のプリントを用意しています。またプリントは映像を見ながら記入します。空欄を作り映像内で説明があった文言を記入したり、選択肢にマルをつけたりします。映像の内容を整理できるだけでなく、記入欄を設けることで主体的に参加できるよう工夫しています。書く作業を取り入れることで集中力の維持にもつながっていると感じています。



Q. どのように映像を活用していますか?

映像の中で、「○○の感情を抱いていますか？」といった問いかけがあります。参加者には、答えの選択をしてもらい主体的に取り組めるよう促しています。そのうえで動画を見て感じたことを話し合ってもらいます。例えば、「嫌悪」をテーマとした回では、登場人物が母親の映画の好みに対して「反感を持つ」と表現する場面があります。これに対して参加者からは、「映画の好みは人それぞれなのに、なぜ反感を持つのだろう」といった意見が挙がりました。私たちは、そのような違和感を大切な気づきとして捉え、「なぜそう感じたのか」「自分だったらどう受け止めるか」について話し合います。私たちはテーマとなる感情を理解するだけでなく、映像の登場人物に対して抱いた印象や違和感についても積極的に取り上げています。FACEDUOには、このように参加者の考えが分かれる場面が数多くあります。私たちは感情の名称や特徴を学ぶだけでなく、映像を“生きた教材”として活用し、登場人物の言動や考え方について意見を交わしながら、感情理解や他者理解を深められるよう支援しています。特にASDの患者さんの中には、相手の気持ちや受け取り方を推測することが難しい方もいます。そのため、「どのような感情を抱くか」だけでなく、「その感情をどのように表現すると相手に伝わるのか」「相手はどのように受け止めるのか」といった視点についても、参加者同士で考えたり助言し合ったりすることを大切にしています。



映像を見る → 感情について考える → 仲間と話し合う → 自分を振り返る

プログラム前後の変化

当院では2025年6月よりFACEDUOを活用した感情認知トレーニングを開始し、これまでに40名以上の10代入院患者が参加しました。そのうち、1か月以上入院し、入院時・退院時の両方で評価を実施できた15名を対象に、ESCoM研究で使用された評価尺度を用いて評価結果を確認しました。

FEST（表情から感情を読み取る力）
BLERT（声や表情、しぐさなどから感情を読み取る力）
Hinting（相手の意図や気持ちを推測する力〔心の理論〕）



※FEST（表情認知）、BLERT（声・表情・しぐさの感情認知）、Hinting（他者の意図や気持ちの推測）は、北海道大学大学院医学研究院 神経病態学分野精神医学教室様よりご提供頂きました。

各尺度において、評価時点間で2ポイント以上の変化がみられたケースは延べ18件でした。特に、相手の意図や気持ちを理解する「心の理論」に関連する領域で、多くの変化が認められました。当院では、認知作業トレーニングやデジタルゲームを用いたグループ活動なども行っており、今回の結果は、これらを含めた包括的な支援の中で確認された変化と捉えています。社会認知機能は、人と関わりながら生活していくために大切な力です。こうした力を育むことは、友人や家族との関係、学校生活など、日常生活への適応につながる可能性があると考えています。

体験者よりも家族や医療者が変化を実感



プログラムに参加した患者さんからは、
- **「気持ちを言葉にするのは勉強になった」**
- **「みんなで勉強するのは楽しい」**
- **「発言すると褒められてうれしかった」**

といった声が聞かれました。

変化をより強く実感していたのは、主治医やご家族など周囲の方々

- **「以前より落ち着いて過ごせるようになった」**
- **「表情や言動が穏やかになった」**
- **「相手を思いやるような優しい言葉が増えた」**

といった評価が寄せられています。



当院では、感情認知トレーニングを「感情や対人関係について学ぶ機会」と位置付けています。参加者同士で意見を交わしながら他者の考え方に触れ、自身の行動を振り返る経験が、復学や社会参加に向けた動機づけにもつながっていると感じています。

FACEDUOの感情認知コンテンツは、感情を表す言葉、表情、声や仕草、そして共感までを体系的に学ぶことができるため、集団でのトレーニングに活用しやすい教材です。参加者同士で意見を出し合いながら学ぶことで、感情の理解だけでなく、自身の対人関係やコミュニケーションを振り返る機会にもなっています。今後も評価データの蓄積を進めながら、より良い支援につなげていきたいと考えています。



特定医療法人 さっぽろ悠心の郷 ときわ病院 作業療法士
平泉 淳一 先生

SST未経験でも取り組めるプログラムとして活用

SSTを週1回、1時間のプログラムとして実施。10回を1クールとして継続的に実施。

▸「いつか」のための練習

デイケア利用者の中には、実際に練習した内容をすぐ日常生活で試す機会が少ない方もいます。
しかし、プログラムでは
「今すぐ使うためだけではなく、将来その場面に出会ったときに自然に行動できるよう準備しておくことも大切です」
と伝えながら取り組んでいます。
転ばぬ先の杖のように、事前にさまざまな場面を学んでおくことが、将来の生活や社会参加につながる可能性があります。

▸学びを積み重ねる工夫

毎回のプログラム内容を「FACEDUOファイル」としてまとめています。
ワークシート・練習計画シート・参加者の意見などをまとめて保管し、
クールの終了時に振り返り資料として配布しています。
さらに次回扱うテーマのあらすじも事前に紹介し、「次回は何を学ぶのか」を分かりやすく伝えることで、継続的な参加につなげています。



▸SSTの経験がなくても実施しやすい

FACEDUOの特長の一つは、SSTの専門的な経験がなくても取り組みやすいことです。

映像教材を活用しながら、
☑ **こんな時どう対応するか** ☑ **相手はどう感じているか** ☑ **自分ならどう行動するか**

を参加者同士で話し合うことができます。進行手順や教材が用意されているため、SSTの専門的な経験が少ない支援者でもプログラムを実施しやすく、参加者との対話に集中できます。

FACEDUOへの期待

当院では、北海道の精神科医療機関としていち早くFACEDUOを導入し、SSTや感情認知トレーニングに活用してまいりました。私たちは、精神疾患の治療において薬物療法は重要な柱である一方、それだけでは十分ではなく、心理社会的療法を組み合わせることが患者さんのリカバリーに欠かせないと考えています。FACEDUOは、感情を理解し、他者との関わり方を学ぶ機会を提供できる点で、当院の実践するリハビリテーション医療との親和性が高い教材です。また当院の強みは、児童・思春期から成人、高齢者まで、すべてのライフステージに応じた切れ目のない支援を提供できることにあります。精神科病院としての医療機能に加え、発達支援センターや放課後等デイサービスなどの福祉事業も展開しており、医療と福祉の両面から地域を支える体制を整えています。今後もFACEDUOをはじめとした新しい取り組みを積極的に活用しながら、一人ひとりのリカバリーを支え、よりよい地域生活や社会参加の実現につなげていきたいと考えています。



特定医療法人 さっぽろ悠心の郷
ときわ病院 院長
吉田　拓 先生

詳しくは公式サイトにて

faceduo　検索

販売 Otsuka　開発・製造 JOLLY GOOD!

2026年10月作成
FD2610013

本システムは医療機器ではありません。本システムはSSTの実施（トレーニング）を目的としたVRを用いたSST支援プログラムです。